



TITLE:

第44回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第44回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1967, 35(4): 524-526

ISSUE DATE:

1967-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207387>

RIGHT:

第 44 回 岐 阜 外 科 集 談 会

日時：昭和42年 2 月15日午後 5 時より

場所：岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 肋骨に発生せる骨軟骨腫の 1 例

岐大整形外科

日比野光男・西本 虎正

第一外科

桧垣 潜

症例 25才，女子，工員

生来健康，初診41年 8 月 8 日，約 2 ヶ月前より誘因なく左前胸部に小指頭大の無痛性腫瘤を生じた。レ線写真では左第 3 肋骨の骨軟骨移行部で，音門部陰影のすぐ左側に円形の陰影を認め，その中必部はやや淡くなつた感じであつた。入院を要め 8 月19日手術施行し，腫瘍を摘出し，組織学的には骨軟骨腫であつた。

以上の一例報告と共に，文献的考察を加え報告した。

2. Crohn 氏病の 1 例

岐大第一外科

嘉 屋 和 夫

症例は17才男子，家族歴・既往歴は特記すべきものなし。主訴は食事摂取後の腹痛。4 週間前より腹痛・食欲不振，全身倦怠感，体重減少あり，次第に症状は増悪した。嘔吐，下痢はなかつた。局所症状は右下腹部に軽い圧痛のみ，他に異常所見は認められなかつた。白血球数，10800 であつた。手術所見は虫垂は正常で，回腸末端，口側約10cmの所まで発赤し，手拳大に浮腫状に肥厚し，その前壁には境界不明瞭な直径約 2 cm の黒褐色で壊死状になつており穿孔直前と思われる部分があり，又腸間膜，腸間膜リンパ腺が腫脹していた。更に Bauchin 弁より 60cm 及び 160cm のところに Skiparea があつた。本疾患は再発の多いものであるが，早期発見，適応した手術により充分に根治する事が出来ると思われる。

3. 食道滑平筋腫の 1 例

岐大第一外科

島津 栄一・岩堤 慶明

患者：33才，女。主訴：嚥下障害。現病歴：3 年前より嚥下障害，軽度の胸骨後方痛を来たし，胸部レ線に異常陰影を指適され来院。入院時所見：尋常な婦人で，胸部に視診，聴打診上異常ない。レ線では，前後像で上部縦隔より右に突出する半円形の腫瘤陰影と大動脈弓の左方突出，左側面像で縦隔中失部に大動脈と無関係の楕円形の腫瘤陰影あり，気管支は前後に圧迫されていた。食道造影では鎖骨の高さより拡張あり，その中に円形の中心性陰影欠損があつた。手術所見（昭和41年11月 4 日）：GOP 麻醉下で第 5 肋間で開胸すると腫瘤は奇静脈の上方で食道後壁輪状筋層内に3/4周にわたつて存在し，鈍的に剝離出来た。剔出標本：8.5×5.5×4.0cm 大で平滑，黄白色，弾性硬であつた。組織学的には滑平筋腫でした。経過良好で術後41日目に退院した。

4. 門脈圧亢進症をともなつた先天性総胆管拡張症の 1 例

岐大第 1 外科(鬼束惇哉教授)

早野 薫夫・加藤 正夫

29才女子で全身倦怠感，頭痛を主訴として内科に受診し貧血，脾腫を指摘され，パンチ氏症候群の診断のもとに外科に転科し手術を施行した。

手術により肝は萎縮性肝硬変の像を呈し，肝下部には小児頭大の緊満性囊腫を認め穿刺により胆汁とビリルビン系石多数を認めた。又胆嚢にも結石 2 個を認めたので胆嚢剔出と共に剔脾及び囊腫十二指腸吻合を行なつた術後28日目より食道静脈瘤よりの出血を来たし始めたので再開腹により食道横断術を行なつたが術後39日目に死亡した。

5. はなはだ稀な Fibrocystic disease of the pancreas の 2 例

羽島病院外科

河村雄一・国藤三郎・関野昌宏

我々は最近のはなはだ稀な Fibrocystic disease of the pancreas の 2 例を経験した。

症例(1) 20才男子

既往歴：幼少児期から特記すべきものなし

主 訴：左季肋部痛，

手術所見：脾臓全部にエンドウ大から桜実大の囊腫を多発性に認める。内容は粘稠帯黄色の液体，他臓器には視触診上 Cyst を認めず。

症例(2) 31才男子

既往歴：特記すべきものなし。

主 訴：左季肋部痛及び下痢。

手術所見：脾体部に手拳大の囊腫が1個ありその周囲にエンドウ大からクルミ大の囊腫が多発する。症例(1)(2)共に病理組織診断では Fibrocystic disease of the pancreas である。

Fibrocystic disease of the pancreas の2例を報告し多少の文献的考察を加えた。

6. 虫垂癌の1例

大垣市民病院外科

森 直之・蜂須賀喜多男・富安 信
加藤量平・○石川覚也・村瀬充也
田本杲司

症例は66才の女性で発熱(39°C)と回盲部痛を主訴として来院した。糞便の潜血反応が陽性である他，一般検査で異常なかつた。回盲部に大きさ6cm×3cmの硬く，表面平滑で可動性の殆どない楕円形の腫瘍を触れ，圧痛は著明であつた。回盲部腫瘍と診断し開腹して見ると虫垂腫瘍であり，被つていた大網膜を結紮切除して虫垂切除術を施行した。切除標本は大きさ10cm×4cmで虫垂炎性腫瘍と思われたが，組織検査で粘液変性を伴なつた腺癌と判明した。癌組織は粘膜に限局して虫垂根部への浸潤は認められなかつた。術後6ヵ月経た今日健康で異常はない。本症例は Uihlein 及び McDonard の Adenocarcinoma of colonic type で極めて稀なものであり，本邦に於いて1900年以来17例報告されているにすぎない。

7. 結石を伴つた膀胱憩室の1例

県立岐阜病院

石 山 勝 蔵

66才の男。25年前より淋疾後の尿道狭窄が膜腰部にある。今回この狭窄部直上に嵌入した尿道結石による尿意逼迫を主訴として来院したが，この他に膀胱部に小指頭大2個の結石陰影あり。軸性撮影にて膀胱の後

方にあることを知り，尿道拡張後の膀胱鏡検査・膀胱造影にて，憩室は右尿管口附近に憩室孔をもつ内容約160cc のものと診断，膀胱外憩室摘除術を行なつた。後面の癒着が強く，憩室孔は漸く小指を通ずる位であつた。術後1週間腹臥させ，経過良好で一期癒合。組織学的には，軽度の慢性炎症のみ。

尿道結石は0.1g憩室内のものは1.0g及び1.8gで尿酸結石。

8. 副腎皮質腫瘍による Cushing 氏症候群の1手術治験例

岐阜市民病院泌尿器科

尾 関 信 彦

同 内科

永 井 俊 夫

34才女子，典型的な Cushing 氏症候群を呈した症例を報告した。術前の内分泌学的検査，及びレ線検査にて後腹膜腔気体造影法・腎部断層撮影法において，左副腎部の肥大ないし腫瘍と思われる影像を認めた。手術により，3.0×2.5×2.0cmほぼ球形，10.2gの腫瘍を剔出した。病理組織学的に腺腫であつた。術後3ヵ月を経過した現在，比較的佳良なる経過を辿り治癒したと思われる。その他本症例について，術中，術後の管理，特に補療法，内分泌学的検査，血糖値，電解質値，血圧の変動等，術後経過と治療成績について述べて検討を加えた。

9. 重複癌の1例

岐阜市民病院外科

安 江 幸 洋

症 例：患者は65才女子，主訴，空腹時の心窩部痛及び膨満感

既往歴：3年6ヵ月前左乳癌の根治術を受け組織学的に管内性乳頭腺癌であつた。

現病歴：約3ヵ月前より心窩部痛，1ヵ月前より腹部膨満感，食欲不振を来たしレ線透視にて胃癌の診断を受け来院，胃切除術を施行腫瘍は胃小彎側中央部にあり鶏卵大で中心部は潰瘍を形成，組織学的に髄様腺癌で小彎側リンパ腺に転移を認めた。以上乳癌と胃にそれぞれ原発した重複癌の一例について報告した。

10. 腹部大動脈瘤の1例

村上病院

吉 友 睦 彦

岐大外科

早 野 薫 夫

最近偶然発見された腹部大動脈瘤の一治験例を経験したので報告する。

患者は69才男、臍部左側に手拳大の腫瘍あり、搏動はふれず胃疾患として手術したところ腹部大原脈瘤を発見。諸検査の結果動脈硬化症による腹部大動脈瘤と診断、心障害があつたが前処置の上切除手術施行、代用血管を移植した。術後経過順調で術後3ヵ月の今日健在である。

なお別に巨大な腹部大動脈瘤破裂例を経験し重篤なショック症状のまま死亡したが、本疾患は放置すれば周囲臓器の圧迫か、上述の如き運命をたどるものであるから、積極的に根治手術を施行すべきものと考えらる。

11. 新生児硬膜下血腫の1例

岐大第二外科

村 瀬 佳 辰

症例は外傷の既往のない生後42日目の男児で、入院2日前よりミルクを飲まず、下肢を伸展し、前日には吸吮力消失し、当日になると顔面蒼白、全身ぐったりとし全く泣かなくなつた。当日午前某医の腰椎穿刺にて、キサントクロミー、古い赤血球多数を認める髄液が証明された。入院時、顔面蒼白、呼吸は不整で除脳硬直を認めた。瞳孔は右側で散大し、対光反射消失。強い貧血と脱水に対し急拠輸血を開始し、引続いて試験穿頭術を行なうに右前頭部に厚さ約1cmの薄い被膜をもつた水腫に移行し掛つた硬膜下血腫を認めた。血腫内容吸引、洗滌を行ない、菲薄であつたので血腫被膜は剥出しなかつた。術後経過良好で何ら神経学的脱落症状を残す事なく全治退院した。新生児硬膜下血腫の1例を報告すると共に、本疾患の頻度、発生原因、診断、治療等について文献的考察を行なつた。

12. 結核性腹膜炎と誤まれた卵巣血腫

岐大第二外科

坂井 昇・三輪 勝

患者は23才の主婦であり入院2ヵ月前から腹痛及び腹部膨満を主訴として、某医にて腸管癒着症の疑いで治療を受けていたが昭和41年11月9日再び上記の愁訴が増強した為、当外科に入院した。この患者は各種補助診断の結果結核性腹膜炎の疑いがもたれたが脳波上棘波の出現が観察されたことは特異であつた。手術結果はダグラス窩に存せるほぼ手拳大の卵巣血腫であり捻転の形跡はなかつた。

本症例は不定の腹部症状を訴えながら慢性に経過したので我々は結核性腹膜炎を疑つたわけであるがダグラス窩に血腫が存したと何回かの黄体出血を繰返して腫大した為に腫瘤を触知し難く診断を誤つたと思われる。以上の如く婦人科疾患でありながら外科疾患と誤まれる境界疾患として外科医も無関心であつてはならない一つであるので敢えて我々の症例を報告した。

13. 吾々の経験した小児後腹膜腫瘍の症例

岐大第二外科

渡 辺 尚

昭和32年1月より42年1月迄の10年間に、当科に入院した小児腫瘍患者は71例で当期間中に入院した小児患者総数730例の9.9%に相当する。その内頭蓋内腫瘍が26例(36.6%)で最も多く次いで腹部腫瘍18例(25.3%)、リンパ管腫6例(8.4%)等の順になつてゐる。腹部腫瘍18例の内12例は後腹膜腔より発生しており、小児の腫瘍好発部位である事を物語つてゐる。卵巣腫瘍1例を除いて他の11例を組織学的に区分すると、Wilms腫瘍4、Neuroblastom 4、Neurofibrom、Embryonalcarcinom、Teratom各1例である。手術を希望しなかつた1例を除いてWilms腫瘍では全例全剥出に成功したが、他の腫瘍7例の内4例は試験切除に留まつた。以上の症例について、年令、性、左右別に分類すると共に、若干の考察を加えて報告した。